素性集の系統分類

酒井　修

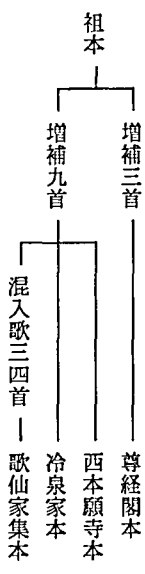
一　はじめに

私が私家集に関わることになったのは、卒業研究において滝澤貞夫先生の命により、凡河内躬恒を取り上げたことが縁である。卒業研究は全くたいした内容ではなかったが、その後、先生と『校本凡河内躬恒全歌集と総索引』（笠間書院、昭和58年）を出版する機会に恵まれ、その過程でようやく少しばかり私家集研究の奥深さを知るところとなった。

出版に至る前であったが、滝澤先生より躬恒の歌歴についての問い合わせがあり、つまらない返事を書いてしまったことがある。暫くして手に入れた『三代集の研究』（小沢正夫編、明治書院、昭和56年）には滝澤先生による「躬恒の歌試論」という論文が掲載されていた。そこには、素性が躬恒の師ではなかったかという新見解が示されていたのであった。私が、素性法師に興味を持ったのはこの論文がきっかけであった。

二　素性集の系統分類をめぐる定説

素性集の系統分類に関しては、島田良二著『平安時代前期私家集の研究』（桜楓社、昭和43年）を初めとして、辞典類においても皆一致した見解を載せている。島田氏の見解により、西本願寺本・歌仙家集本・冷泉家本・尊経閣本の系統を図示すると次のようになる。



素性集が、古今集・後撰集収録の素性歌を主な材料として編纂されていることは、島田氏が「祖本」は「古今・後撰を中心とし

た他撰本」（前掲書）と注記している通りであり、誰にも異論のないところであろう。しかしながら、四本の系統分類に関しては、定説は、増補歌数・混入歌数にとらわれ過ぎており、より詳細に調査してみる必要があるのではないか、というのが私の考えである。

三　素性集四本再吟味

素性集の四本の重なり表を作ると次のようになる。仮に冷泉家本を基に作成してみた。斜体は重出歌である。

略号は次の通りである。

冷：冷泉家本　　西：西本願寺本　　尊：尊経閣本
歌：歌仙家集本

歌	尊	西	冷
1	37	1	1
2	38	2	2
3	3	3	3
10	2	4	4
			5
34	4	6	6
33	5	5	7
5	7	8	8
6	8	9	9
7	39	10	10
8	17	11	11
9	33	12	12

歌	尊	西	冷
17	*20*	*25*	*29・57*
18	*21・52*	*26*	*31・58*
15	36	55	59
87		57	60
88		58	61
89		59	62
90		60	63
91		61	64
92		62	65
93		63	66

歌	尊	西	冷
47	45	45	45
30	46	39	46
49	55	47	47
52	56	56	48
28	47	48	49
32	41	49	50
50	25	50	51
45	26	43	52
46	27		53
86	11	51	54
51	32	52	55
13	18	53	56

歌	尊	西	冷
23	54	31	34
24	31	32	35
43	49	33	36
83	*50*	*22*	*26・37*
27	57	36	38
26	48	35	39
31	30	37	40
44	44	40	41
	29	41	42
84	28	42	43
85	16	44	44

歌	尊	西	冷
41	40	21	25
83	50	22	26・37
42	51	23	27
16	19	24	28
17	20	25	29・57
19	53	27	30
18	21・52	26	31・58
22	42	30	32
48	43	46	33

歌	尊	西	冷
11	24	13	13
12	23	14	14
35	6	15	15
36	1	16	16
37	9	17	17
38	10	18	18
39	34	19	19
14	35	54	20
40	12	20	21
21	13	29	22
4	14	7	23
29	15	38	24

重なり表を見て気づいた点を挙げてみる。

歌	尊	西	冷	歌	尊	西	冷	歌	尊	西	冷	歌	尊	西	冷
82				70				58				94		64	67
96				71				59				95		65	68
97				72				60				20	22	28	
98				73				61				25		34	
99				74				62					58		
				75				63					59		
				76				64					60		
				77				65				53			
				78				66				54			
				79				67				55			
				80				68				56			
				81				69				57			

①
四本共通歌はその多くが古今集・後撰集収録歌であり、古今集・後撰集が主材料であることは間違いない。

②
古今集収録歌のかなりの部分は、古今集の配列に従っているが、どう並べ直しても古今集の配列に近づかない歌もある。

③
後撰集収録歌は、一部を除き、三首程度の二つの歌群に分かれている。

④
冷泉家本・西本願寺本・歌仙家集本のどれを基準にして重ねてみても、一部を除き総体としては、連続した歌群から成り立っているとわかる。また、順番が異なる場合でも、多くは連続した歌群単位で相違しているから、各伝本ごと固有の錯簡があったものと予想される。

⑤
西本願寺本・歌仙家集本のグループと、冷泉家本・尊経閣本のグループ、の二つのグループで、歌の配列に共通した特徴も見られる。（表1）

【表1】

尊	冷	歌	西
2	*4*	10	4
	5		
5	*7*	*33*	*5*
4	*6*	*34*	*6*
14	23	*4*	*7*
7	*8*	*5*	*8*
22		20	28
13	*22*	21	29
14	*23*	4	7
15	*24*	*29*	*38*
46	46	*30*	*39*

尊	冷	歌	西
45	*45*	*47*	*45*
43	33	*48*	*46*
46	*46*	30	39
55	47	49	47

ここでは三箇所について挙げてみたが、斜体の部分に各グループの特徴が見られる。各グループ毎に連続の仕方に一致点が見られるからである。

これは、西本願寺本と歌仙家集本の近さ、冷泉家本と尊経閣本の近さを示しているのではないかと考えられる。

⑥ 祖本が三首単位程度で構成されており、その結果、いずれかの伝本において三首程度で錯簡をおこしたのではないかと思われる箇所がある。

【表2】

尊	冷	歌	西
55	47	49	47
47	*49*	28	48
41	*50*	32	49
25	*51*	50	50
11	*54*	86	51
32	*55*	51	52
18	*56*	*13*	53
35	20	*14*	54
36	59	*15*	55
56	48	52	56

仮に西本願寺本の47から56を基にして他の三本を重ねたのが【表2】であり、斜体の部分が三首単位となっている。

⑦ 冷本に重出歌三首があるが、重出歌は冷本・尊本系統の特徴であり、これも両本の近さを示している。

【表3】

西本	歌本	冷本	尊本	部立	三代集
51	86	54	11	秋	古今二七三
52	51	55	32	秋	
53	13	56	18	恋	古今四七〇
54	14	20	35	恋	古今五五五
55	15	59	36	恋	古今五七五
21	41	25	40	秋	後撰三九三
22	83	26・37	50	羇旅	後撰一三六七
23	42	27	51	雑	後撰一一四四
24	16	28	19	恋	古今六九一
25	17	29・57	20	恋	古今七一四
26	18	31・58	21・52	恋	古今七二二
27	19	30	53	恋	
56	52	48	56	春	後撰 五〇
57	87	60		羇旅	

【表3】は、重出歌のある前後を、出来る限りいずれかの伝本で番号が連続するように並べ直したものである。

先ず、重出歌が冷泉家本と尊経閣本にのみあることに注目したい。しかも重出歌の内の一首は同じ歌のところである。冷泉家本

・尊経閣本では二種類の歌番号の流れが混在していることもわかる。このことから、冷泉家本と尊経閣本はかなり近い関係にあることがうかがわれる。

次に、西本願寺本で言えば二一番歌から二三番歌に当たる三首の前で各伝本共、一度途切れた形となっていることに気づく。この三首は、後撰集の歌であり、古今集収録歌群を分断しているのは不自然である。この三首の不自然さは各伝本に共通しているので、かなり古い時点で錯簡が生じていたことをうかがわせる。後撰集収録歌の配列に関しては次の項目で問題にしてみたい。

さて、重出歌が冷泉家本と尊経閣本とでは数が異なるのはなぜだろう。恐らくこれは、西本願寺本の番号で言えば、二一番歌から二七番歌に当たる部分が重出する形となり、冷泉家本・尊経閣本共に気付いた範囲で重出歌を削除したが、結果としてこれだけ削除し残したということだろう。

⑧ 後撰集収録歌の配列には不自然さがある。

【表4】は後撰集収録歌を抜き出したものである。後撰集二八番歌だけは、各伝本の連続した配列の中には含まれていないが、それ以外の七首についていえば、各伝本共に、何らかの形では連続した配列となっていることが知られる。

【表4】

西本	歌本	冷本	尊本	部立	後撰集	備考
7	4	23	14	春	二八	
21	41	25	40	秋	三九三	
22	83	26・37	50	羇旅	一三六七	
23	42	27	51	雑	一一四四	
45	47	45	45	雑	一〇九二	
46	48	33	43	雑	一〇九三	
47	49	47	55	雑	一〇八九	蟬丸歌
56	52	48	56	春	五〇	

【表5】は西本願寺本を基準にして西本願寺本の二一番歌から二三番歌を含む前後を表にしたものであり、【表6】は同様にして、西本願寺本の四五番歌から四七番歌を含む前後を表にしたものである。

【表5】

西本	歌本	冷本	部立	三代集番号	備考
19	39	19	夏	古今集 一四四	
20	40	21	秋	古今集 二四一	
21	41	25	秋	後撰集 三九三	

22	83	26・37	羇旅	後撰集一三六七		43	45	52	賀	古今集 三五三	
23	42	27	雑	後撰集一一四四			46	53	賀	古今集 三五四	
24	16	28	恋	古今集 六九一		44	85	44	秋	古今集 三〇九	
25	17	29・57	恋	古今集 七一四		45	47	45	雑	後撰集一〇九二	
						46	48	33	雑	後撰集一〇九三	
						47	49	47	雑	後撰集一〇八九	蟬丸歌
						48	28	49	秋	古今集 四二一	
						49	32	50	春	拾遺集 五	
						50	50	51	秋	古今集 二九三	

【表6】

どちらの表でも後撰集収録の三首が古今集収録の歌群を分断しており、配列上不自然な形となっている。錯簡のためと思われるが、【表4】の内の後撰集二八番歌を除いた形が本来の形ではなかっただろうか。

四　共通祖本を考える

各伝本共通の歌群の内、配列がどこかの伝本において可能な限り連続するように並べ直してみたのが、【表7】である。

【表7】

No	西本	歌本	冷本	尊本	部立	三代集番号	備考
1	1	1	1	37	春	古 六	
2	2	2	2	38	春	古 三七	
3	3	3	3	3	春	古 四七	
4	7	4	23	39	春	後 二八	
5	8	5	8	17	春	古 五五	
6	9	6	9	33	春	古 五六	
7	10	7	10	2	春	古 七〇	詠人不知
8	11	8	11	24	春	古 七六	
9	12	9	12	23	春	古 一〇一	興風歌
10	4	10	4	14	春	古 九二	
11	13	11	13	6	春	古 九五	
12	14	12	14	1	春	古 九六	
13	15	35	15	9	春	古 一〇九	

No	西本	歌本	冷本	尊本	部立	三代集番号	備考
32	32	24	35	31	賀		
31	31	23	34	54	恋		
30	30	22	32	42	恋		
29	29	21	22	13	恋	古八〇二	
28	28	20		22	恋	古七九九	
27	27	19	30	53	恋		
26	26	18	31	52	恋	古七二二	重出歌
25	25	17	29	20	恋	古七一四	重出歌
24	24	16	28	19	恋	古六九一	
23	55	15	59	36	恋	古五七五	
22	54	14	20	35	恋	古五五五	
21	53	13	56	18	恋	古四七〇	
20	6	34	6	8	秋	古一八一	
19	5	33	7	7	秋	古二四四	
18	20	40	21	4	秋	古二四一	
17	19	39	19	5	夏	古一四四	
16	18	38	18	12	夏	古一四三	
15	17	37	17	34	春	古一二六	
14	16	36	16	10	春	古一一四	

No	西本	歌本	冷本	尊本	部立	三代集番号	備考
51	53	13	56	18	恋	古四七〇	
50	52	51	55	32	秋		
49	51	86	54	11	秋	古二七三	
48	50	50	51	25	秋	古二九三	
47	49	32	50	41	春	拾五	
46	48	28	49	47	秋	古四二一	
45	44	85	44	16	秋	古三〇九	
44		46	53	27	賀	古三五四	
43	43	45	52	26	賀	古三五三	
42	42	84	43	28	賀	古三五六	
41	41		42	29	哀傷	古八三〇	
40	40	44	41	44	春	古七七	承均歌
39	39	30	46	46	春	古九九	詠人不知
38	38	29	24	15	雑	古九四七	
37	37	31	40	30	賀	古三五七	
36	36	27	38	57	雑体	古一〇一二	
35	35	26	39	48	恋		
34	34	25			恋		
33	33	43	36	49	恋		

No	西本	歌本	冷本	尊本	部立	三代集番号	備考
52	54	14	20	35	恋	古 五五五	
53	55	15	59	36	恋	古 五七五	
54	24	16	28	19	恋	古 六九一	
55	25	17	57	20	恋	古 七一四	重出歌
56	26	18	58	21	恋	古 七二二	重出歌
57	21	41	25	40	秋	後 三九三	
58	22	83	26	50	羇旅	後一三六七	重出歌
59	23	42	27	51	雑	後一一四四	
60	45	47	45	45	雑	後一〇九二	
61	46	48	33	43	雑	後一〇九三	
62	47	49	47	55	雑	後一〇八九	蝉丸
63	56	52	48	56	春	後 五〇	

この六十三首が私の想定している共通祖本である。この共通祖本想定部分を更に詳しくみると、三つの基幹部分から成り立っていることがわかる。

第一基幹部分（No1～36）の三十六首

この部分は、春（1～15）・夏（16～17）・秋（18～20）・恋（21～35）・雑（36）から成り、古今集の配列に概ね従っている。古今集収録歌でない歌が七首あるが、出典は不明である。恋の歌群には賀の歌が一首混入している。

第二基幹部分（No37～56）の二十首

この部分は古今集収録歌を中心に編まれているが、古今集の配列には従っていない。部立も前後が著しく、雑纂部分と言える。

第三基幹部分（No57～63の七首）

この部分は【表4】に示した後撰集収録歌の歌群である。

五　補遺部分の検討

歌仙歌集本では、第三基幹部分の後に、それまでの書写の際に書き落とした歌を、原本の配列に従って補っている。それが歌仙歌集本の八三番歌から八六番歌の四首である。

また、尊経閣本では、第三基幹部分の後に独自の補遺部分（58～60の三首）を付けている。

以上の補遺部分の付き方から見ても、共通祖本には第一基幹部分から第三基幹部分までしかなかったと言える。

次に尊経閣本以外の三本に共通した補遺部分について検討して

みたい。

【表8】

西本	歌本	冷本	部立
57	87	60	羇旅
58	88	61	羇旅
59	89	62	羇旅
60	90	63	羇旅
61	91	64	羇旅
62	92	65	羇旅
63	93	66	春
64	94	67	春
65	95	68	秋

歌の配列は完全に一致している。しかし、細かくみると、西本願寺本の六一番歌に当たる歌の詞書には「天皇」（西本願寺本）・「天暦」（歌仙歌集本・冷泉家本）の二系統があるとわかる。内容から考えて「天暦」は「天皇」の誤写と思われる。そうなると、共通祖本の成立後にこの補遺部分を付けた西本願寺本が先ず成立したと言えるのではないだろうか。そしてこの西本願寺本の補遺部分を自らの伝本に補ったのが歌仙歌集本と冷泉家本であると考えられる。ただ、最初に「天暦」と書き誤ったのはどちらであり、その誤写をそのまま転写したのがどちらかということになると、幾つかの可能性が考えられることになる。歌仙歌集本は更にこの他に独自の補遺部分三三首を持っているので、冷泉家本の方が先に西本願寺本の補遺部分を写したのであり、歌仙歌集本がその冷泉家本の補遺部分を転写して、更に独自の補遺部分を付けたのだと考えた方が良いかも知れない。

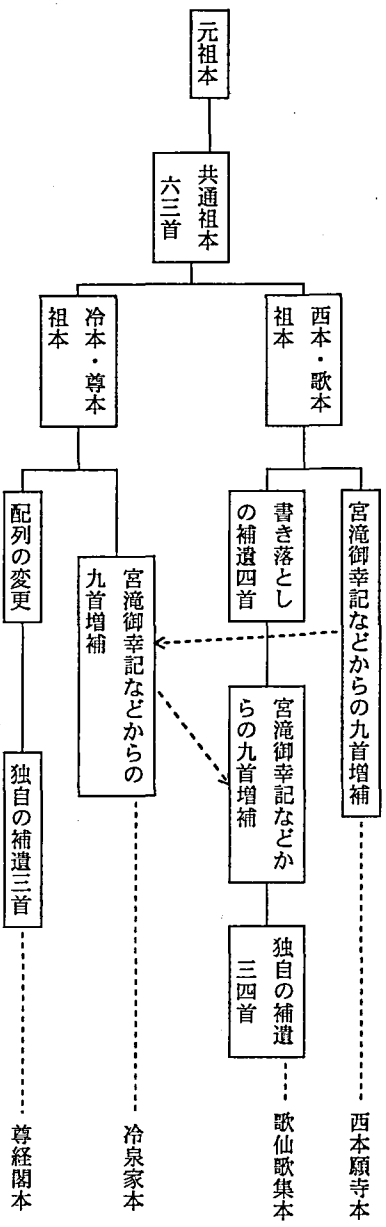
ここで、歌仙歌集本の補遺部分についてもまとめておきたい。

歌仙歌集本の歌番号で言うと、出典不明の部分（53～82の三十首）・基幹部分の転写の補充（83～86の四首）・冷泉家本を転写したと思われる宮滝御幸日記などの補遺（87～95の九首）・出典不明の部分（96～99の四首）が補遺部分に当たる。内容を考えると、本来の形は、〔83～86の四首〕・〔87～95の九首〕・〔53～82の三十首〕・〔96～99の四首〕ではなかったかと思う。

六　系統分類のまとめ

西本願寺本と歌仙歌集本の近さ、冷泉家本と尊経閣本の近さ、そして今までの補遺部分の検討を踏まえると、各伝本の系統は次ページの図のようになる。共通祖本のそのまた祖本を仮に「元祖本」とすると、当然のことながら「元祖本」には重出歌はなかったと考えられる。

略号　西本：西本願寺本　歌本：歌仙歌集本
冷本：冷泉家本　尊本：尊経閣本



七　終わりに

与えられた枚数もほぼ尽きようとしているので、舌足らずのままこの論を閉じることをお許しいただきたい。

滝澤先生に信州大学で学んだのは二年間であったが、文学とは感性による印象批評でしかなかった私には、文学を計量化する手法や緻密に理論化してゆく手法には、たいへんな驚きを感じたものだった。まだ着任当時と言うこともあって、かなり学生に遠慮なされていた時期であったとは後で知った。今から思えば極めて残念と言う他はない。その後に先生に学んだ学生が羨ましい。

最後に、滝澤先生のますますのご活躍をお祈り申し上げ、合わせてこの会誌に寄稿する機会を与えて下さったことに感謝申し上げて終わりとしたい。

（さかい　おさむ　長野県飯田風越高校教諭）